

うた時計

新美南吉

青空文庫

二月のある日、野中のさびしい道を、十二、三の少年と、皮のかばんをかかえた三十四、五の男の人とが、同じ方へ歩いていった。

風がすこしもないあたたかい日で、もう霜しもがとけて道はぬれていた。

かれ草にかけをおとして遊んでゐるからすが、ふたりのすがたにおどろいて、土手をむこうにこえるとき、黒い背中せなかが、きらりと日の光を反射するのであつた。

坊ぼう、ひとりでどこへいくんだ」

男の人が少年に話しかけた。

少年はポケットにつつこんでいた手を、そのまま二、三ど、前後にゆすり、人なつこいえみをうかべた。

「町だよ」

これはへんにはずかしがったり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子どもなどと、男の人は思ったようだった。

そこでふたりは、話しはじめた。

「坊、なんて名だ」

「れんていうんだ」

「れん？ れん平^{べい}か」

「ううん」

と、少年は首を横にふった。

「じゃ、れん一か」

「そうじゃないよ、おじさん。ただね、れんていうのさ」

「ふうん。どういう字書くんだ。連絡^{れんらく}の連か」

「ちがう。点をうつて、一を書いて、ノを書いて、ふたつ点をうつて……」

「むずかしいな。おじさんは、あまりむずかしい字は知らんよ」

少年はそこで、地べたに木ぎれで「廉」と大きく書いてみせた。

「ふうん、むずかしい字だな、やつぱり」

ふたりはまた歩きだした。

「これね、おじさん、清廉^{せいれん}潔^{けつ}白^{ぱく}の廉^{れん}て字だよ」

「なんだい、そのセイレンケツパクてのは」

「清廉潔白というのは、なんにも悪いことをしないので、神様の前へ出て、巡査につか

まっても、平気だということだよ」

「ふうん、巡査につかまってもな」

そういつて、男の人はにやりとわらった。

「おじさんのオーバーのポケット、大きいね」

「うん、そりや、おとなのオーバーは大きいから、ポケットも大きいさ」

「あったかい？」

「ポケットの中かい？ そりやあ、あったかいよ。ぽこぽこだよ。こたつがはいってるよ
うなんだ」

「ぼく、手を入れてもいい」

「へんなことをいう小僧こぞうだな」

男の人はわらいだした。でも、こういう少年がいるものだ。近づきになると、相手のからだにさわったり、ポケットに手を入れたりしないと、承知ができぬという、ふうがわりな、人なつこい少年が。

「入れたっていいよ」

少年は、男の人のがいとうのポケットに、手を入れた。

「なんだ、ちつともあつたかくないね」

「はっは、そうかい」

「ぼくたちの先生のポケットは、もつとぬくいよ。朝、ぼくたちは学校へいくとき、かわりばんこに先生のポケットに手を入れていくんだ。木山先生というのさ」

「そうかい」

「おじさんのポケット、なんだか、かたい冷たいものがはいつてるね。これなに？」

「なんだと思う」

「かねでできてるね……大きいね……なにか、ねじみたいなものがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから美しい音楽が流れだしたので、ふたりはびっくりした。男の人はあわてて、ポケットを上からおさえた。しかし、音楽はとまらなかつた。それから男の人は、あたりを見まわして、少年のほかにはだれも人がいないことを知ると、ほっとしたようすであつた。天国で小鳥がうたつてもいるような美しい音楽は、まだつづいていた。

「おじさん、わかつた、これ時計とけいだろう」

「うん、オルゴールつてやつさ。おまえがねじをさわったもんだから、うたいだしたんだ

よ」

「ぼく、この音楽だいすきさ」

「そうかい、おまえもこの音楽知ってるのかい」

「うん。おじさん、これ、ポケットから出してもいい？」

「出さなくてもいいよ」

すると、音楽は終わってしまった。

「おじさん、もう一ぺん鳴らしてもいい？」

「うん、だあれもきいてやしないだろうな」

「どうして、おじさん、そんなにきよろきよろしてるの？」

「だって、だれかきいていたら、おかしく思うだろう。おとながこんな子どものおもちやを鳴らしては」

「そうね」

そこで、また男の人のポケットがうたいはじめた。

ふたりはしばらくその音をききながら、だまって歩いた。

「おじさん、こんなものを、いつも持って歩いてるの」

「うん、おかしいかい」

「おかしいなア」

「どうして」

「ぼくがよく遊びに行く、薬屋のおじさんのうちにも、うた時計があるけどね、だいにして、店のちんれつだなの中に入れてあるよ」

「なんだ、坊、あの薬屋へ、よく遊びに行くのか」

「うん、よくいくよ、ぼくのうちの親類だもん。おじさんも知ってるの？」

「うん……ちよつと、おじさんも知っている」

「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をとでもだいじにしているね、ぼくたち子どもに、なかなかさわらせてくれないよ……あれッ、またとまっちゃった。もう一ぺん鳴らしでもいい？」

「きりがいいじゃないか」

「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ、ね、ね。あ、鳴りだしちゃった」

「こいつ、じぶんで鳴らしといて、あんなこといつてやがる。ずるいぞオ」

「ぼく、知らないよ。手がちよつとさわったら、鳴りだしたんだもん」

「あんなことやってやがる。それで坊は、その薬屋へよくいくのか」

「うん、じき近くだからよくいくよ。ぼく、そのおじさんとなかよしなんだ」

「ふうん」

「でも、なツかなか、うた時計を鳴らしてくれないんだ。うた時計が鳴るとね、おじさんは、さびしい顔をするよ」

「どうして？」

「おじさんはね、うた時計をきくとね、こういうわけかしゅうさく周作しゅうさくさんのことを思い出すんだって」

「えッ……ふうん」

「周作って、おじさんの子どもなんだよ。不良少年になってね、学校がすむと、どつかへいっちやったって。もうずいぶんまえのことだよ」

「その薬屋のおじさんはね、その周作……とかいうむすこのことを、なんとか知っているかい？」

「ばかなやつだって、いってるよ」

「そうかい。そうだなあ、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまったな。坊、もう一

どだけ、鳴らしてもいいよ」

「ほんと?……ああ、いい音だなあ。ぼくの妹のアキコがね、とっても、うた時計がすきでね、死ぬまえに、もう一ぺんあれをきかしてくれて、ないてぐずったのでね、薬屋のおじさんとこから借りてきて、きかしてやったよ」

「……死んじやったのかい?」

「うん、おとしのお祭のまえにね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓はかがあるよ。川原かわらから、おとうさんが、このくらいのまるい石をひろってきて立ててある、それがアキコのお墓さ、まだ子どもだもんね。そいでね、命日めいにちに、ぼくがまた薬屋からうた時計を借りてきて、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやったよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

ふたりは大きな池のはたに出た。むこう岸の近くに、黒く二、三ばの水鳥がうかんでいるのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケットから手をぬいて、両手をうちあわせながらうたった。

「ひいよめ、

ひよめ、

だんご、やアるに

くウぐウれツ」

少年のうたうのを聞いて、男の人がいった。

「いまでもその歌をうたうのかい？」

「うん、おじさんも知っているの？」

「おじさんも子どものじぶん、そういつて、ひよめにかかったものさ」

「おじさんも小さいとき、よくこの道をかよったの？」

「うん、町の中学校へかよったもんさ」

「おじさん、また帰ってくる？」

「うん……どうかわからん」

道がふたつにわかれているところにきた。

「坊はどっちイいくんだ」

「こつち」

「そうか、じゃ、さいなら」

「さいなら」

少年はひとりになると、じぶんのポケットに手をつつこんで、ぴよこんぴよこんはねながらいった。

「坊ウ……ちよつと待てよオ」

遠くから男の人がよんだ。少年はけろんと立ちどまって、そっちを見たが、男の人がしきりに手をふっているの、またもどつていった。

「ちよつとな、坊」

男の人は、少年がそばにくると、すこしきまりのわるいような顔をしていった。

「じつはな、坊、おじさんはゆうべ、その薬屋のうちでとめてもらったのさ。ところがけさ出るとき、あわてたもんだから、まちがえて、薬屋の時計を持ってしまったんだ」

「……………」

「坊、すまんけど、この時計とそれから、こいつも（と、がいつもの内かくしから、小さい懐中時計^{かいちゅうどけい}をひっぱり出して）まちがえて持ってきたから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろう？」

「うん」

少年はうた時計と懐中時計を、両手にうけとった。

「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいつてくれよ。さいなら」

「さいなら」

「坊、なんて名だったつけ」

「清^{せい}廉^{れん}潔^{けつ}白^{ぱく}の廉^{れん}だよ」

「うん、それだ、坊はその清廉……なんだっけな」

「潔白だよ」

「うん潔白、それでなくちやいかんぞ。そういうりっぱな正直なおとなになれよ。じゃ、ほんとにさいなら」

「さいなら」

少年は、両手に時計を持ったまま、男の人を見送っていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稲^{いな}積^{づみ}のむこうに見えなくなってしまった。少年はてくてくと歩きだした。歩きながら、なにかふにおちないものがあるように、ちよつと首をかしげた。

まもなく少年のうしろから自転車が一台、追っかけてきた。

「あッ、薬屋のおじさん」

「おう、廉坊^{れんぼう}、おまえか」

えりまきであごをうずめた、年よりのおじさんは、自転車からおりた。そしてしばらくのあいだ、せきのためものがいえなかった。そのせきは、冬の夜、枯木^{かれき}のうれをならす風の音のように、ヒユウヒユウいった。

「廉坊、おまえは村から、ここまできたのか」

「うん」

「そいじや、いましがた、村からだれか男の人が出てくるのと、いっしよにならなかったか」

「いっしよだったよ」

「あッ、そ、その時計、おまえはどうして……」

老人は、少年が手に持っているうた時計と懐中時計に目をとめていった。

「その人がね、おじさんの家でまちがえて持ってきたから、返してくれていったんだよ」
「返してくれろって？」

「うん」

「そうか、あのばかめが」

「あれ、だれなの、おじさん」

「あれか」

そういつて老人は、また長くせきいった。

「あれは、うちの周しゅうさく作だ」

「えッほんと？」

「きのう、十なん年ぶりで、うちへもどつてきたんだ。ながいあいだ悪いことばかりしてきたけれど、こんどこそ改心して、まじめに町の工場ではたらくことにしたから、といつてきたんで、ひと晩とめてやったのさ。そしたら、けさ、わしが知らんでいるまに、もう悪い手くせを出して、このふたつの時計をくすねて出かけやがった。あのごくどうめが」

「おじさん、それでもね、まちがえて持つてきたんだつてよ。ほんとにとつていくつもりじゃなかったんだよ。ぼくにね、人間は清せい廉れん潔けつ白ぱくでなくちゃいけないっていったよ」

「そうかい。……そんなことをいつていつたか」

少年は老人の手にふたつの時計をわたした。うけとるとき、老人の手はふるえて、うた時計のねじにふれた。すると時計は、また美しくうたいだした。

老人と少年と、立てられた自転車かれのが、広い枯野かれのの上にかげを落として、しばらく美しい

音楽にきき入った。老人は目になみだをうかべた。

少年は老人から目をそらして、さつき男の人がかくれていた、遠くの、稲積の方をながめていた。

野のはてに、白い雲がひとつういていた。

青空文庫情報

底本：「牛をつないだ椿の木」角川文庫、角川書店

1968（昭和43）年2月20日初版発行

1974（昭和49）年1月30日12版発行

入力：もりみつじゅんじ

校正：門田裕志、小林繁雄

2005年6月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

うた時計

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>